

ディケンズ(Dickens)の『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854)は、小説の舞台がロンドンではなく、英国北部の架空の工業都市コークタウン(Coketown)である点で、他の作品とは違っている。ディケンズが舞台に工業都市を選んだのは、功利主義に支配された産業社会への批判を行うためである。その批判を展開する中で、彼はスリアリー(Sleary)のサーカスを功利主義に対立するものとして描いている。サーカスとそれが体現する空想(fancy, imagination)の有用性や重要性を説き、さらにそれらを労働者たちに与えるように主張している。この主張に対して、従来の批評は、大別すれば次の2つの見方を提示してきた。

1つ目は、サーカスや空想を字義通りの意味しか持たないものとし、ディケンズの主張を批判的に捉える見方である。例えばホロウェイ(Holloway)は、ディケンズは深刻な社会問題の解決を、単なる娯楽や空想という安易なものに委ねていると酷評する(168)。またロッジ(Lodge)は、非人間的な産業社会の疾病の万能薬として、ディケンズは空想という一時的な逃避を提供しているに過ぎないと非難する(158-59)。

2つ目は、サーカスや空想を象徴的な意味を持つものと見なし、先の非難に異を唱える見方である。例えばシュリック(Schlicke)は、サーカスの提供する空想は健全で人間的な精神を育成するものだと考える。そして、ここで描かれているサーカスは産業社会が抱える問題への実際的な解決策ではなく、それを追求する際の指針となるべき精神を養うものだと指摘する(188)。マニング(Manning)は、スリアリーのサーカス団を人間的な徳性に基づき形成された集団と解する。さらに彼女は、ディケンズはそれを非人間的な社会のアンチテーゼとして描いてはいるが、功利主義による支配体制の代替となる社会組織、つまり社会問題に対する解決策として提唱してはいないと主張する(142-43)。

こうした2つの解釈はそれなりに興味深いものではあるが、両者は共にスリアリーのサーカスに十分な検討を加えていないという点で不満が残る。例えば、小説中でサーカスにキリスト教のイメージが与えられていることには、ほとんど注意が向けられていない。確かに、ヒューズ(Hughes)のようなサーカスとキリスト教との関連に言及している批評家もいる。彼の議論は、ディケンズはキリスト教精神と深く関わるフレーベル(Friedrich Froebel)の教育哲学を受け継いでいることを前提としている(3-14)。そして、彼らが理想とした“the true Christian training”がスリアリーのサーカスにはあり、それが産業社会の問題に対する解決策としても提示されていると主張する(152-53)。しかしヒューズは、この小説における教育問題と産業社会問題を同一視し、前者について検討し導き出した結論を後者にも当てはめるという方法を取っている。そのために、彼の議論では労働者についての分析が全くなされていない。そこで本論文では、ディケンズがサーカスにキリスト教の

イメージを与えた理由を考察し、そのうえで、労働者たちについて検討しながら、彼らにサーカスを与えよというディケンズの主張が持つ意味を検討する。

この小説では、サーカスはキリスト教のイメージで描かれている。例えば、サーカスが最初に描写される場面で、サーカス小屋は「教会」(14)と呼ばれ、そこでの演芸は「道徳的な奇跡(moral wonders)」(14)だと語られる。また、団長のスリアリーは聖像などを置く「教会の壁龕」(14)に座す彫刻に例えられ、キューピット役の少年には「子供たちの聖堂(kids' minster)」とでも訳せそうなキダーミンスター(Kidderminster)という名がつけられている。

さらに、サーカス団員を代表する人物シシー(Sissy)には、キリスト教精神が具体的に反映されている。シシーは、功利主義思想の下で詰め込み教育をする学校の教師マチョーカムチャイルド(M'Choakumchild)¹に、ある町での餓死者の比率を算出しろと言われた時、餓死者の数が幾らだろうが彼らにとって辛いことに変わりはないと答える(75)。また、政治経済学の基本原理を問われた時、彼女は「人々にして欲しいと思うことを人々にすることです」と答える(75)。この返答は明らかに、「マタイ伝」(7.12)で語られている黄金律への言及である。これらは、人間の感情を蔑ろにして統計学的数字や事実のみを偏重する考え方への批判であると同時に、シシーの慈悲心や思いやりがキリスト教精神から生じたものであることを伝えている。

別の場面では、サーカスが提供する空想は子供時代の夢と言い換えられ、それは「偉大なるチャリティ」(262)へと発達すると語られている。さらに、その直後には、“Suffer the little children to come unto me”(Mark 10.14)というキリストの言葉を想起させる“suffering little children to come into the midst of it”(263)という言葉が続けられている。「チャリティ」は、単なる豊かな愛情や感情ではなく、キリスト教の基本理念である隣人愛を意味していることが分かる。ディケンズは、サーカスは人々に空想を提供することで、彼らの心にチャリティ、ひいてはキリスト教精神を養うものだと言っている。

一方でディケンズは、サーカスと対立関係にある功利主義者のグラッドグラインド(Thomas Gradgrind)や資本家たちをも、キリスト教と関連させながら描いている。グラッドグラインドは、数字で表せないものや目に見えないものを決して信じない事実偏重の現実主義者であることが強調されている。また、彼は「良きサマリア人は悪しき経済学者だった」(286)と考え、人生とは勘定台越しの契約であり、「もしその方法で天国に行けなければ、そこは政治経済学とは無縁の場所で、我々はそんな場所に何の用もない」(384)と主張する。そして、小説の1巻2章では、彼がトマス・グラッドグラインド、つまり彼の名がトマスであることが繰り返し語られ、強調されている。これらのことを考え合わせると、トマスという名は、キリストと彼の磔刑の傷跡を実際に目にして触れるまではキリストの

復活を信じなかった「疑い深いトマス」を想起させる。とすれば「ジョージ・グラッドグラインドやオーガスタス・グラッドグラインド(...中略...)の頭にはできてもトマス・グラッドグラインドの頭には絶対に押し込めない」(強調筆者)とグラッドグラインド自身が主張する「ばかげた信念(nonsensical belief)」(3)とは、キリスト教信仰を暗示していると考えられる。グラッドグラインドは、反キリスト教精神の持ち主として描かれている。

グラッドグラインドと同じことが、彼と同様の功利主義者であるコークタウンの資本家たちにも言える。彼らに支配されているコークタウンは、神ではなく「事実に身を捧げた町(A town so sacred to fact)」(30)と描かれる。彼らが数字と事実のみを尊重することで築き上げた工場の煙突は「競い合うバベルの塔」(107)、排出される煙は「呪いに従う煙の蛇ども」(92)と語られる。ディケンズは、「バベルの塔」や「蛇」という象徴を使うことで、資本家たちの傲慢さと同時に不信心さを示唆し、彼らが反キリスト教精神の持ち主であることを伝えている。

グラッドグラインドを始めとするこの反キリスト教徒たちは、子供や労働者たちからサーカスなどの娯楽を奪い、彼らの心から空想を排除しようとする。このことは、グラッドグラインドとその仲間が「the Graces の咽喉を掻き切る」(164)のに躍起だったと表現される。ここでの“the Graces”は美の三女神を指すと、シンプソン(Simpson)は注解している(166)。しかし小説の最終章で、空想などの精神的なものを無視することの誤りに気づいたグラッドグラインドの未来について、「事実や数字を信仰、希望、愛(Faith, Hope, and Charity)のために役立つようになり、もはやその天の三人組を彼の埃まみれのちっぽけな碾き臼で砕こうとはしなくなる」(395-96)と語られている。この語りを考慮すれば、“the Graces”は美の三女神である「カリスタたち(the Charites)」よりも、より直接的には「信仰・希望・愛」を指す「キリスト教の三枢要徳(the three Christian graces)」だと考えられる。さらに、聖書はこの三枢要徳について、「3つの中で最も大いなるものは愛(Charity)である」(1 Cor. 13.13)と述べている。すると「the Graces の咽喉を掻き切る」という表現は、キリスト教的愛を抹殺することと解釈できる。この表現は、グラッドグラインドたちが人々の心から空想を排除しようとするのは、彼らが人々の心からキリスト教精神を排除しようとしていることを意味するのだと暗示している。

従来の批評では、サーカスと功利主義者たちとの関係は、「空想」と「事実」、或いは「感情」と「理性」の対比だと単純に解されてきた。そして、ディケンズはこの対比を通して、精神的なものを顧みない思想を批判する一方で、サーカスに代表される娯楽や空想を人々に与えること、つまり精神的なものの重要性を説いていると解釈されてきた。しかしこれまで考察してきたように、この小説における功利主義者たちは、反キリスト教精神の持ち主であり、空想を敵視することで人々の心からキリスト教精神を除去しようとする者として描かれている。これに対してサーカスは、キリスト教精神を体現し、空想を通して人々にその精神を養うものとして描かれている。つまり、労働者にサーカスや空想を与えるよ

うに提言する時、ディケンズは具体的にキリスト教精神を養うことを主張しているのだ。では、ディケンズがこの主張で意図するものは何か。これを知るために、次は、コークタウンの労働者たちについて検討する。

この小説では、労働者たちが非人間的な産業社会の中で抑圧されている姿と、彼らが雇い主に抵抗すべく労働組合を作るまでの物語が語られる。しかし、労働組合結成という労働者たちの反抗が如何なる結果になるのかは、直接的には描かれていない。これは紙面に制限があったことと、労働者たちの物語が最も主たる物語ではなかったことのためだと考えられる。だが、ディケンズは労働者たちをグラッドグラインドの子供たちと関連づけることで、彼らのその後の姿を間接的に語っている。

コークタウンと労働者たちについての最初の描写直後に、「コークタウンの住民の場合とグラッドグラインドの子供たちの場合との間には類似性があるのではないだろうかと思う」(31)と語られている。両者に類似性があることは、この小説を読めばすぐに分かる。例えば、グラッドグラインドの子供ルイーザ(Louisa)とトム(Tom)は、彼の教育システムの模範生として育てられる。グラッドグラインドは、「事実だけが人生で必要だ」(1)と断言し、「現実主義の人間」で「事実と計算の男」(3)であることを自負する人物である。さらに、彼は「人間の性質とは単なる数字の問題、簡単な数学の一例にすぎない」(3)と考えている。従って、彼の教育システムでは統計上の数字や事実のみが重んじられ、子供たちの感情や個性は無視されている。一方コークタウンは、「事実、事実、事実、これが町の物質的な局面の至る所にあり、事実、事実、事実、これが精神的なものの至る所にある」(29)と表される町である。その町の労働者たちは、功利主義の資本家や役人の下で、数字や事実とは相容れない空想や娯楽を与えられない。そのうえ、「働き手(Hands)」と総称される彼らは、個性や感情を持つ個人としてではなく、文字通り「働く手」としか扱われていない。このようにグラッドグラインドの子供たちとコークタウンの労働者たちは、共通性と類似性を持つ。それゆえ、グラッドグラインドの子供たちを考察することは、労働者たちについての理解を深めることへと繋がる。

ルイーザとトムは精神的に抑圧され虐げられていると感じながら、父親の教育システムの下で育てられてきた。そしてルイーザは、結婚は感情ではなく結婚に関する統計に見られるような明白な事実の問題だと説く父親に従って、彼女が嫌うバウンダビー(Bounderby)と結婚する。その結果、彼女は不幸な結婚生活を送ることになる。その後、彼女はハートハウス(Harthouse)に誘惑され、彼から逃れるために父親の下に帰る。その時ルイーザは、父親に対してこれまでの鬱積していた感情を爆発させる。彼女は、結婚を機に「より激しくなった昔の苦悶が束縛に対して反乱を起こし」(290)、転落の人生を辿るようになったと述べる。続けて、父親の教育システムが自分の不幸の原因だと言って卒倒

する。この告白と「彼の教育システムの勝利の証」(292)であったルイーザの哀れな姿が、グランドグラインドを「打ちのめして」(295)しまう。彼自身が言うように、彼の「唯一の支え」だった己の理念とそれに基づく教育システムが、「一瞬のうちに崩れ去ってしまった」のだ(295)。

さらに、打ちひしがれた父親にトムが追い討ちをかける。放蕩の末の借金に苦しむトムは、自分の働いていた銀行で強盗を働き、そのうえその罪を善良なブラックプール(Blackpool)に負わせようと画策した。事の真相を追及する父親に対して彼は、被雇用者の数が多ければその中にいる不正を働く被雇用者の数も多くなるのが法則だと父親は言い続けていたが、その法則通りのことが起こっただけだと反論する(378)。トムは父親が授けた教育を逆手にとって、卑劣な自己弁明をしている。このことがグランドグラインドに再度、彼の教育システムが失敗で、それが完全に崩壊したことを痛感させる。これは、事実や数字とそれらを発見した人々に「復讐」し、「自分が育てられたやり方に報いてやる」(68)という子供時代のトムの言葉が実現したことを意味する。

ルイーザとトムは、彼らの抑圧者だった父親とその教育システムに「反乱」を起こして「復讐」し、それらを崩壊させた。このことと、彼らがコークタウンの労働者たちと共通性を持つ対称関係にあることを考慮すれば、労働者たちの反抗の結末もルイーザやトムのものと同じになると想像できる。実際、この小説には次のような描写がある。

Cultivate in [the common people], while there is yet time, the utmost graces of the fancies and affections, [...] or, in the day of your triumph, when romance is utterly driven out of their souls, and they and a bare existence stand face to face, Reality will take a wolfish turn, and make an end of you.
(216)

労働者たちを抑圧し、彼らへの精神的搾取を完了する「勝利」の時が来れば、支配者たちは「獣」と化した彼らに倒されるというわけだ。グランドグラインドの「勝利の証」だったルイーザやトムが「復讐」するために「反乱」を起こして彼の教育システムを崩壊させたように、支配者たちの勝利の証となるはずの労働者たちが、逆襲に転じて支配システムを破壊する時が来るのが予言されている。さらに、労働者たちはルイーザやトムのような個人ではなく、階級としての集団であることを考え合わせれば、ホーンバック(Hornback)を始め多くの批評家が指摘しているように、先の引用は革命に対する警告だと解せる(116)。

ディケンズは、労働者たちへの抑圧がこのまま続けば、彼らは逆襲に転じて革命が起こると考えている。そこで、次は、この革命を作者ディケンズがどのようなものと捉えてい

たのかを考えてみよう。

コークタウンの労働組合には、スラックブリッジ(Slackbridge)というオルグがいる。彼は労働者たちへの演説で、彼らの支配者を「独裁制」(182)を敷く「専制君主」(184)と呼ぶ。また、「同志諸君(Brotherhood)の神聖にして永遠なる特権」(182)を食い物にしてきた支配者たちを粉碎するのだと訴え、組合の労働者たちは「自由と権利の勇敢な擁護者」(185)なのだという。さらに彼は、圧制者たちを倒すために労働者たちは「一体(One united power)」(182)となり、「個人的な感情は共通の大義のために捨てなければならない」(190)と主張する。労働者たちは、スラックブリッジに煽動されて、例えば、愛する人との約束を守るために組合に入ることを拒絶したブラックプールを村八分にする。圧制者たちから「自由」や「権利」を取り戻すために集結したはずの労働者たち自身が、今度は、「共通の大義」のためには仲間の個性や感情を認めない圧制者へと変わっている。

そして、労働者たちを煽動してブラックプールを追放する時に、スラックブリッジは「コークタウンの人間の神聖な義務は、(...中略...)神聖で神々しい大義によって張られた天幕から裏切り者を追放することではないのか」(190)というレトリックを使っている。後には、この狡猾なデマゴグの言葉は、「福音」(330)と称されている。また、ブラックプールは仲間から放逐される際に、「俺が死にかけて道に横たわっていても、俺が外国人やよそ者であるかのように素通りしていくことが正しいと皆が感じているのはよく分かります」(188)と言う。この科白は、追いはぎに襲われ「死にかけて」道に横たわる旅人に、「素通り」した他の者とは違い唯一救いの手を差し伸べたサマリア人の話を通して、キリスト教精神の基本的理念であるチャリティを説く良きサマリア人のたとえ(Luke 10.30-37)への言及となっている。労働者たちは、スラックブリッジの「福音」に従い「神聖な義務」として、良きサマリア人とは正反対の行動を取り、ブラックプールを「犠牲」(211)にした。

このような労働者たちは、以下で述べる『二都物語』(*A Tale of Two Cities*, 1859)のフランス民衆を想起させる。『二都物語』では、フランス民衆は搾取され続けた末に、圧制者たちに反乱を起こす。革命で彼らが掲げた標語は、「自由、平等、友愛、しからずんば死」(*TTC*, 338)であった。また、この革命を突き動かしていたものは、民衆の「人民の祭壇の上に犠牲を捧げ、さらに自らをも犠牲にしたいという渴望」(*TTC*, 411)だったと語られている。これらのことが示しているように、彼らは「自由、平等、友愛」、そして「一体不可分の共和国」(*TTC*, 356)という共通の大義のためには、如何なる犠牲をも厭わなかった。実際に、彼らは圧制者たちだけではなく、お針子などの無辜の仲間の命さえも奪う。専制支配に反乱を起こした民衆が、今度は逆に残虐な圧制者となり、新たな専制支配体制を築いている。この様子を語る中でディケンズは、マダム・ドファルジュ(Madam Defarge)という「宣教師」(*TTC*, 224)に導かれて、十字架の代わりに「聖女ギロティーヌ」(*TTC*, 462)を信仰するようになる民衆を描いている。そしてそのような民衆を、自らが手がけた犠牲者に助けの手を差し伸べる「サマリア人たち」(*TTC*, 333)と表現している。

以上で見てきたように、『ハード・タイムズ』の労働者と『二都物語』の民衆は共に、その集団の目的を達成するためには個人を犠牲にし、その過程で自らが圧制者となっていく。そしてその姿を描く際に、ディケンズは歪められたキリスト教精神という同じイメージを用いている。このように、コークタウンの労働者とフランス民衆は、強い類似性を持っている。また、前者の「自由」「権利」「同胞」という言葉には、後者の「自由、平等、友愛」に通ずる響きがある。これらのことから、ディケンズが思い描いていた労働者たちの反乱とは、フランス民衆の革命と同種のものだと推測できる。

ディケンズが描くフランス民衆の革命とは、残忍な復讐行為であり、さらにそれは「共食い」をも意味するカニバリズムでもある。だから、暴徒と化した民衆の1人は、「人命を渴望する食人者の面持ちの残忍そうな (life-thirsting, cannibal-looking, bloody-minded)」(*TTC*, 390)と形容され、「人食い鬼」(*TTC*, 444)とも呼ばれている。また、復讐相手を凝視するマダム・ドファルジュは、彼の死を想像しながら「宴をしているドファルジュの妻 (his feasting wife)」(*TTC*, 393)と表現されている。とすれば、コークタウンの労働者たちも「恐ろしくて悪意に満ちた」(328)暴徒と化してカニバリズムに陥って行くと、ディケンズは考えていたと推測できる。エンゲルス(Engels)は、英国の労働者階級の状態を観察した後、『ハード・タイムズ』出版の9年前の1845年に、彼らの恨みはまもなくフランス革命が子供の遊びに思えるような革命をもたらすだろうと述べている(246)。これと同じような危機感を、ディケンズも感じていたと考えられる。

コークタウンの労働者については、彼らの労働組合の描写、特に、組合のオルグであるスラックブリッジが不誠実で愚かなペテン師として描かれていることが、しばしば批判されてきた。批評家たちは、これらはディケンズが持つ中産階級の偏見や無知の産物であり、この小説の欠点だと見なしている(Johnson 811, Shaw 337-38)。さらにショーは、ディケンズはこれらの描写を通して労働者たちの組合結成を誤りだとすることで、民主主義に背を向けて、軽率にもカーライルとラスキンの理想化されたトーリー主義に従っていると指摘する(338)。ジョンソンに至っては、これらの描写は、小説が持つラディカルな響きに不安を感じたであろう中産階級の読者に、安心感を与えるために描かれたのではないかと主張する(811)。

しかしハウス(House)は、組合には排他的で独裁的な性質があるという考えはこの小説当時に流布していた誤解である(209-10)と、また、スペクター(Spectator)は、労働者たちが怒りと敵意に満ちた暴徒と化すという予想が当時の中産階級の著作におけるありふれた主題だったと述べている(371)。このことを考慮すれば、労働組合やオルグに関する描写は、今日から見れば無知や偏見が露わだったとしても、当時の状況では仕方のない面もあったと思われる。しかしいずれにせよ、ディケンズが労働組合を批判的に描いたのは、労働者たちが組合を結成して権利を主張することを否定したり、組合を無効な騒ぎと見なしたりしていたからではない。それらの描写にディケンズの批判的な態度が見られるのは、彼が

労働者たちの集団化、ウェルシュ(Welsh)の言うところの“collective action”(165)に不安を抱いていたからである。不誠実なペテン師に煽動される組合をディケンズに描かせたものは、集団化した力が誤った者によって、フランス民衆のようにカニバリズムへと導かれて行くことに対する彼の恐怖と嫌悪である。

ディケンズは、労働者たちに同情し、彼らの虐げられている現状を改善すべきだと考えていた。しかし、リード(Reed)が指摘するように、彼はそのための“the need for revolutionary change and the overthrow of unjust institutions”を望んではいなかった(231)。特に、労働者たちのカニバリズム的逆襲と破壊が起こることを恐れ嫌悪していた。そしてディケンズは、このカニバリズムを克服するための力を、キリスト教精神に見いだしている。この小説連載終了直後、ディケンズは、失踪中のフランクリン(John Franklin)率いる北極探検隊について、レイ(John Rae)と論争を交わしている。生存している隊員がカニバリズムに陥り、仲間の遺体を食べて飢えを凌いでいたというレイの報告を聞いたディケンズは、文明国に生まれキリスト教精神を知る者がカニバリズムに陥るわけがないという確信を根拠に、直ぐに反論をした(“The Lost Arctic Voyagers”, 361-65)。さらに『二都物語』では、他者のために命を捨てるカートン(Carton)に、キリストのイメージを与えて彼の死を崇高なものとして描き、その一方で、復讐心に突き動かされてカニバリズム的な残虐行為を行うマダム・ドファルジュに、惨めな死を与えている。この2人の死に様には、カニバリズムに対するキリスト教精神の優位性が示されている。これらのことから、ディケンズがキリスト教精神に、カニバリズムに対する抑止力を見いだしていたのが分かる。

ディケンズは、労働者たちの心にキリスト教精神を涵養することで、彼らがカニバリズム的な復讐行為から現存の秩序を壊滅させてしまう結果を回避したいと願っている。とすれば、『ハード・タイムズ』では、サーカスは本論文の冒頭で挙げたホロウェイが言うような単なる娯楽ではなく、またそれは産業社会における諸問題への解決策として提示されているのではない。サーカスは、カニバリズム克服の方法として提示されているのだ。

註

1 M'Choakumchild は、マックチョーカムチャイルドと表記されることが多い。しかし、本論文では、Thorne の朗読に従ってマチョーカムチャイルドと表記した。

引用文献

Dickens, Charles. *Hard Times*. Ed. Paul Schlicke, Oxford World's Classics. Oxford & New York: Oxford UP, 1998.
. “The Lost Arctic Voyagers.” *Household Words* 10 (2 Dec. 1854): 361-65.

- . *A Tale of Two Cities*. Ed. Andrew Sanders, Oxford World's Classics. Oxford & New York: Oxford UP, 1998.
- エンゲルス, フリードリヒ. 「イギリスにおける労働者階級の状態」『マルクス = エンゲルス全集第 2 巻』. 大内兵衛・細川嘉六監訳. 大月書店, 1960. 225-534.
- Holloway, John. “*Hard Times*: A History and a Criticism.” *Dickens and the Twentieth Century*. Ed. John Gross & Gabriel Pearson. London: Routledge & Kegan Paul, 1962. 159-74.
- Hornback, Bert G. “*Noah’s Arkitecture*: A Study of Dickens’ Mythology. Athens: Ohio UP, 1972.
- House, Humphry. *The Dickens World*. 1941; London: Oxford UP, 1961.
- Hughes, James L. *Dickens as an Educator*. 1903; Honolulu: the Pacific UP, 2001.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*, 2 vols. New York: Simon & Schuster, 1952.
- Lodge, David. *Language of Fiction: Essays in Criticism and Verbal Analysis of the English Novel*. London: Routledge & Kegan Paul, 1966.
- Manning, Sylvia. *Dickens as Satirist*. New Haven & London: Yale UP, 1971.
- Reed, John R. *Dickens and Thackeray: Punishment and Forgiveness*. Athens: Ohio UP, 1995.
- Schlicke, Paul. *Dickens and Popular Entertainment*. 1985; London: Unwin Hyman, 1988.
- Shaw, George Bernard. “Introduction to *Hard Times*.” *Hard Times*. Ed. George Ford & Sylvere Monod, A Norton Critical Edition. 1912; New York: Norton, 1966. 332-39.
- Simpson, Margaret. *The Companion to Hard Times*. Mountfield: Helm Information, 1997.
- Spector, Stephen J. “Monsters of Metonymy: *Hard Times* and Knowing the Working Class.” *ELH* 51 Summer (1984): 365-84.
- Thorne, Stephen, narr. *Hard Times*. By Charles Dickens. Audiocassette. Cover to Cover Cassettes, 2002.
- Welsh, Alexander. *Dickens Redressed: The Art of Bleak House and Hard Times*. New Haven & London: Yale UP, 2000.